

表 6.1.4-5(1) 捕獲移動の実施計画概要 ()



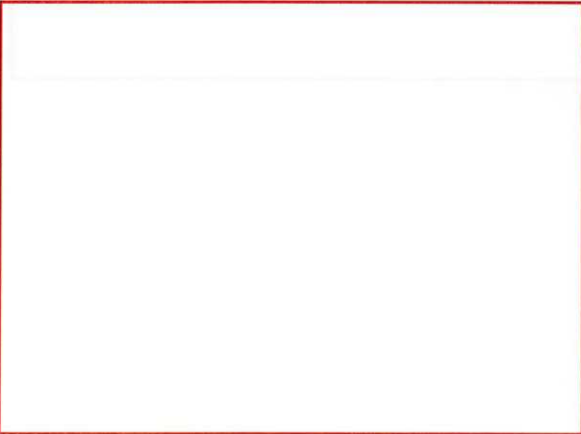
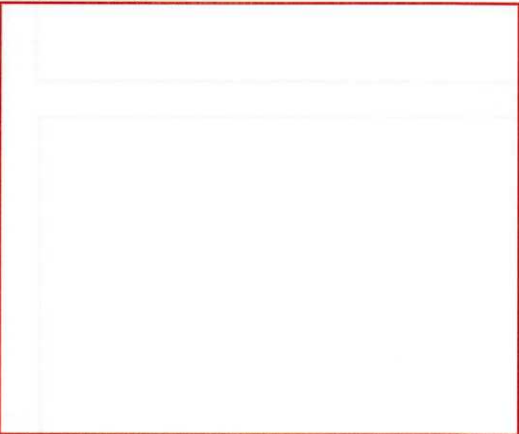
| | |
|--|--|
| <p>1. 移殖工事概要</p> <p>対象動物を含む生息環境(朽ち木)を移殖適地へ移設する。 ※本種は主にスダジイ林の朽ち木内に生息しており、成虫、幼虫ともに群居する生態を有している。</p> | |
| <p>2. 移殖工事の手順</p> <p>1) 現地補足調査の実施(移設対象の生息環境場所の特定)</p> <p>移殖前に、移殖工事数量の詳細を明確にするため、以下の条件(①~③)を目安に現地補足調査を実施し、事業地内における移殖対象の朽ち木のマーキングによる数量把握と、移殖候補地の抽出を行う。</p> <p>①本種の生息環境である「朽ち木」を重点的に探索し、位置と数量を記録する。 本種の生息に好適な「朽ち木」の環境条件は以下のとおりである(学識者ヒヤリング結果より)。 ・適度に湿り気があり腐食部のフレークが赤みがかかった朽ち木 ・シロアリにより食われた乾燥したもの、嫌気的な状態である黒色に腐食したものは対象外とする。</p> <p>②本種の生息環境である「朽ち木」が存在する環境である事業地内の「スダジイ群落」を重点的に調査する。</p> <p>③移殖候補地の選定 ※事業地より影響範囲50m外側において、本種の生息環境である「朽ち木」が存在するスダジイ群落内を探索し移殖地を決定する。この場合、移殖後の結果について、様々な要因からのリスクを分散するために、複数個所を抽出する。</p> <p>2) 移殖対象地における採取と運搬(マーキングした「朽ち木」を土嚢袋等に入れ移殖適地へ運搬する。)</p> <p>3) 移設先での敷設</p> <p>「朽ち木」を崩さないよう留意し現地に敷設する。朽ち木の湿り気等が好適な状態が保たれるように、必要に応じて半地中化などの処理を実施する。</p> | |
|  |  |
| 成虫 | 成虫の特徴 |
|  |  |
| 幼虫 | 朽ち木内での生息の様子 |
| 写真: <input type="text"/> の生態・生息環境 | |

表 6.1.4-5(2) 捕獲移動の実施計画概要 ()

1. 移殖工事概要

本種の生息環境である谷筋沿いの樹林地を中心に、個体の見つけ採りによる捕獲を実施する。
 ※本種は幼虫・成虫とも湿度の高い岸辺の植物の間に潜んで生活する。

2. 移殖工事の手順

1) 現地補足調査の実施(移設対象の生息環境場所の特定)

移殖前に、移殖工事数量の詳細を明確にするため、以下の条件(①~③)に留意し現地補足調査を実施する。
 具体的には、本種の生息状況や生息環境について調査し、事業地内における移殖対象箇所(見つけ採りの対象区域)とその面積を把握する。

- ①事業地内のスタジイ群落の溪流、谷部を重点的に調査する。
 ※本種は、湿度の高い溪流(谷)沿いの植生や落ち葉、朽ち木等に生息する。
- ②また、①の付近の、幹上、樹皮下についても調査する。

③移殖候補地の選定調査

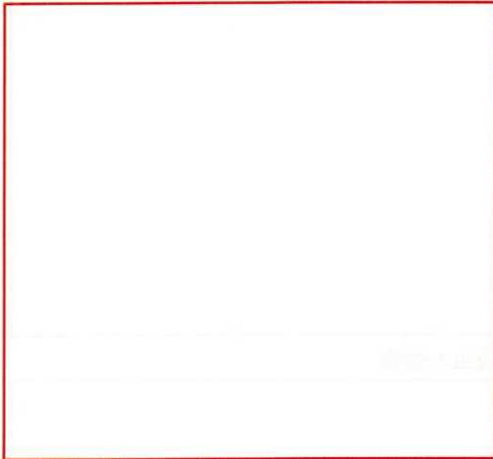
※事業地より影響範囲50m外側において、本種の生息環境箇所を探索し移殖地を決定する。この場合、移殖後の結果について、様々な要因からのリスクを分散するために、複数箇所を抽出する。当該地区では本種は確認されていないため、移殖工事及び現地補足調査で確認された場合実施する。

2) 移殖対象地における採取と運搬

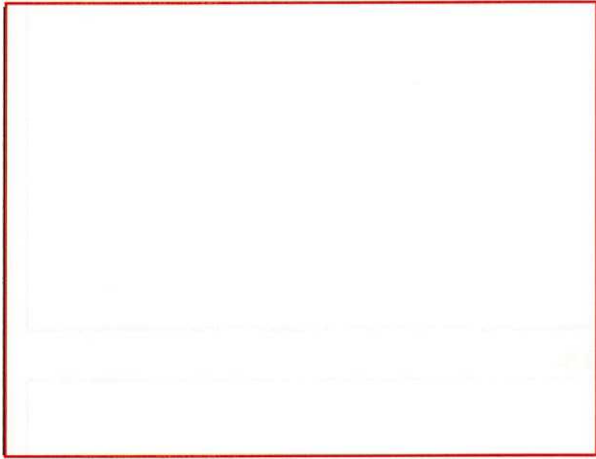
- 1)で把握した本種の生息環境を踏査し、見つけ採りにより個体を捕獲する。

3) 移殖先での放虫

移殖先において運搬した容器から () を放虫する。



成虫



成虫の特徴



幼虫

写真: () の生態・生息環境

表 6.1.4-5(3) 捕獲移動の実施計画概要 ()

1. 移殖工事概要

樹木伐採時に伐採樹木の樹洞内をできる限り確認し、これらによる個体捕獲を試行的に実施する。また、捕獲効率を上げるための腐肉トラップの設置により捕獲を試行する。
 ※本種は幼虫・成虫とも主にスダジイ林の樹洞内に生息する生態を有している。また、成虫は、夜間に幹上、林床、道路で活動し、動物の死骸を食すといった生態を有している。

2. 移殖工事の手順

1) 現地補足調査の実施(移設対象の生息環境場所の特定)

移殖前に、移殖工事数量の詳細を明確にするため、以下の条件(①～②)に留意し現地補足調査を実施する。具体的には、本種の生息状況や生息環境について調査し事業地内における移殖対象箇所(腐肉トラップの設置箇所、樹洞内確認対象樹木)とその数量を把握する。

①事業地内のシイなど大木の樹洞を重点的に調査する。
 ※本種は、シイなど大木の樹洞に生息する。

②移殖候補地の選定調査
 ※事業地より影響範囲50m外側において、本種の生息環境箇所を探索し移殖地を決定する。この場合、移殖後の結果について、様々な要因からのリスクを分散するために、複数箇所を抽出する。当該地区では本種は確認されていないため、移殖工事及び現地補足調査で確認された場合実施する。

2) 移殖対象地における採取と運搬

①本種の生息環境の近辺に腐肉トラップを試行的に設置し個体を把握する(トラップの設置時期は成虫の出現時期である9～12月に限定)。

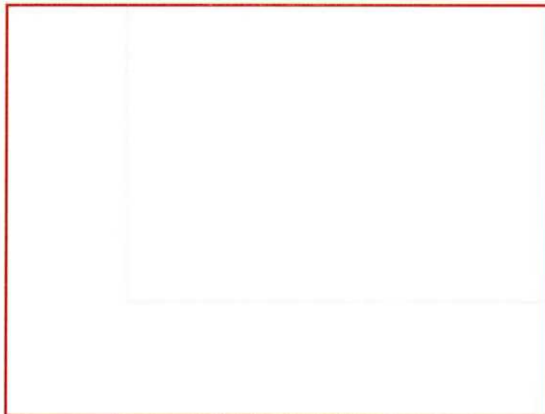
②樹木伐採時に伐採樹木の樹洞内を確認し、見つけ採りによる個体捕獲を試行的に実施する。

③移殖個体の運搬

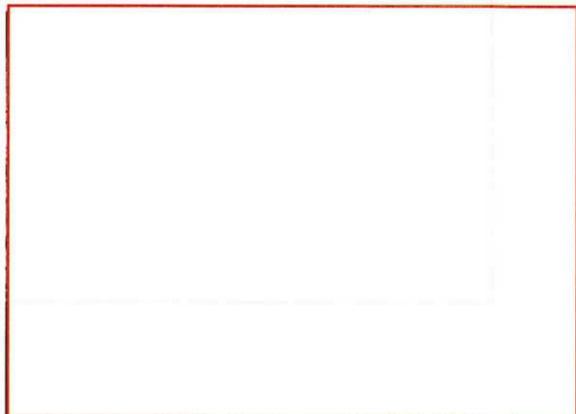
捕獲した個体は、圧死を防ぐために極力個別の容器に入れ、また、熱死を防ぐために通気性のある容器に落ち葉と共に入れ運搬する。

3) 移殖先での放虫

成虫の場合は、移殖先において運搬した容器から を放虫する。幼虫の場合は、移殖先の生息場所として好適な樹洞内に放虫する。本種の生息に適した樹洞がない場合は、樹洞の代用になる巣箱や腐木を掘った人工樹洞などの試行設置を検討する。



成虫



成虫の特徴

写真: の生態・生息環境

表 6.1.4-5(4) 捕獲移動の実施計画概要 ()

1. 移殖工事概要

本種は、樹木伐採時に伐採樹木(スダジイ)を対象に、試行的に産卵された卵塊の確認を行い確認できれば適地へ移殖する。

※本種は冬期に、スダジイやカシ類の枝先や樹幹部に産み付けられた卵で越冬といった生態を有している。

2. 移殖工事の手順

1) 現地補足調査の実施(移設対象の生息環境場所の特定)

移殖前に、移殖工事数量の詳細を明確にするため、以下の条件を目安に本種の生息環境を探索し、事業地内における移殖対象箇所(卵塊の見つけ採りの対象区域)に試行的に確認を行う。

本種の生息に好適な環境条件は以下のとおり。

・幼虫の食樹はカシ類やスダジイで、成虫の生態は不明な点が多い。

2) 移殖対象地における採取と運搬

本種の生息環境を踏査し、樹木伐採時に伐採樹木の樹枝や樹幹を確認し、見つけ採りによる採卵を試行的に実施する(採卵は卵塊が見られる冬期に限定)。

卵塊が確認された場合には、卵塊(卵)を、枝ごと、樹皮ごと採取する。樹皮に産み付けられている場合は、ヘラを用いて卵が落ちないように留意しながら採取する。

採取した卵(卵塊)は、傷つけないように留意しながら移殖場所へ運搬する。

3) 移殖先での放虫

移殖先は、事業による影響が推測されている事業地より50m範囲の外側の本種の生息に適したさほど遠くない位置とし、移殖先では、樹枝や樹皮ごと採取した卵塊は、()の食樹となるスダジイの幹に貼りつけ、または、縛ったりして移殖の完了とする。ただし、移殖場所は、冬期における越冬場所となるため、日照条件、風当たり等の環境条件(基本的に越冬場所は温度変化の小さい場所)が採卵した場所に類似した場所を検討する。

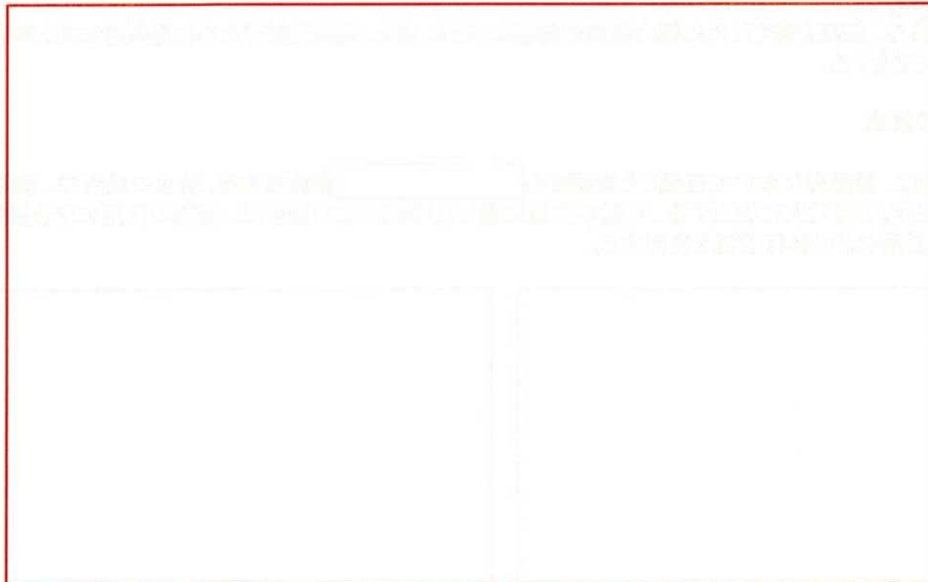


写真: ()の生態・生息環境

表 6.1.4-5(5) 捕獲移動の実施計画概要 (含む)

1. 移殖工事概要

本種は、斜面にある土壁の生息環境を対象に、見つけ採りによる個体捕獲を実施する。

※本種は、裸地面が急斜面になったところに斜め下向きに、深さは20cmに達する巣穴を掘るといった生態を有している。

2. 移殖工事の手順

1) 現地補足調査の実施(移設対象の生息環境場所の特定)

移殖前に、移殖工事数量の詳細を明確にするため、以下の条件(①~②)を目安に本種の生息環境を探索し、事業地内における移殖対象箇所とその面積を把握する。また、合わせて環境の状況、本種の生息状況(各地点の巣穴数・生息数)について記録する。

①本種の生息環境である「斜面にある土壁」を重点的かつ試行的に探索し、移殖対象の位置と数量を記録する。

本種の生息環境条件は以下のとおり。

- ・山地溪流沿いの河岸土手を中心とした場所
- ・スダジイ林や比較的安定した二次林の林床
- ・切り通しなど、裸の地面が急斜面になったところ
- ・日の当たり過ぎないところ

②移殖候補地の選定調査

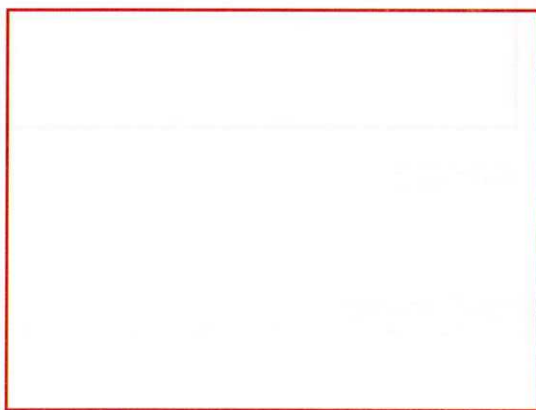
※事業地より影響範囲50mの外側において、本種の生息環境箇所を探索し移殖地を決定する。この場合、移殖後の結果について、様々な要因からのリスクを分散するために、複数箇所を抽出する。当該地区では本種は確認されていないため、移殖工事及び現地補足調査で確認された場合実施する。

2) 移殖対象地における採取と運搬

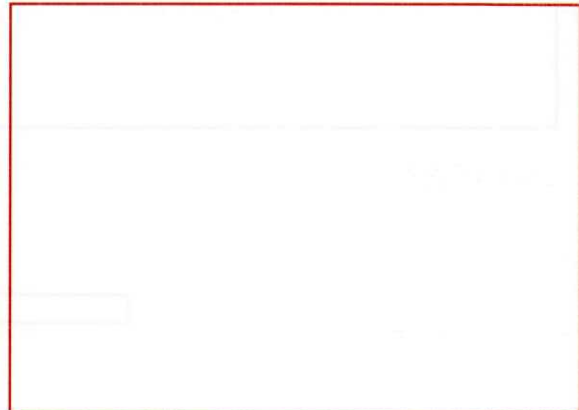
- ・本種の移殖対象地において、見つけ採りによる個体採集を実施する。以下の手順で実施する。
- ・採取は、巣穴を掘り起こし、その土ごと大型のバットに仮置きする。
- ・掘り起こした土中にある個体を傷付けないつけないように留意しながら、ピンセット等を用いて一匹づつ捕獲する方法により実施する。
- ・小さな個体が高密度に営巣している場合などには、掘り取った土ごとバケツに収容する。
- ・運搬中は、熱死を避けるため、日陰で風通しを良くするなどして高温防止に努める。

3) 移殖先での放虫

移殖先は、事業による影響が推測されている事業地より50m範囲の外側の本種の生息に適したさほど遠くない位置とし、移殖先では、の生息環境条件に適合した日の当たり過ぎない所に、個体の大きさに合わせた径・深さの巣穴を掘り、小瓶を近づけ、掘った巣穴にを放虫する。小さな個体が高密度に営巣している場所で掘り取った場合の土は、土壁際の傾斜地に敷設する。



巣穴



本種の特徴

写真: の生態・生息環境

表 6.1.4-5(6) 捕獲移動の実施計画概要 ()

1. 移殖工事概要

本種の生息環境であるシイ林域を中心に、個体の見つけ採りによる捕獲を可能な限り実施する。また、朽ち木と落ち葉の環境移設を実施する。

※本種の生態は不明な点が多いが、シイ林域では自然度の高い森林の林床に生息すると考えられる。また、冬期には活動がにぶり、朽ち木や落ち葉中に潜んでいる可能性もある。稚貝・幼貝は落葉下にも生息する。よって、朽ち木については () の朽ち木移設と同様の方法により移殖適地に移設する。さらに、落ち葉については、微小陸産貝類における環境移設と同様な手法により実施する。

2. 移殖の手順

1) 現地補足調査の実施(移設対象の生息環境場所の特定)

移殖前に、移殖工事数量の詳細を明確にするため、以下の条件(①～②)に留意し現地補足調査を実施する。具体的には本種の生息環境を探索し、事業地内における移殖対象箇所(生息環境移設の対象区域)とその面積を把握する。

①やや自然度の高い森林、スダジイ林やスダジイ林に近い二次林などの比較的的自然度の高い森林を重点的に調査する。

※本種はやや自然度の高い森林の倒木下、適度に湿り気があり腐食部のフレークが赤みがかかった朽ち木、スダジイ林やスダジイ林に近い二次林などの比較的的自然度の高い森林の林床落葉下に生息する。

②また、①付近の朽ち木についても調査する。

③移殖候補地の選定調査

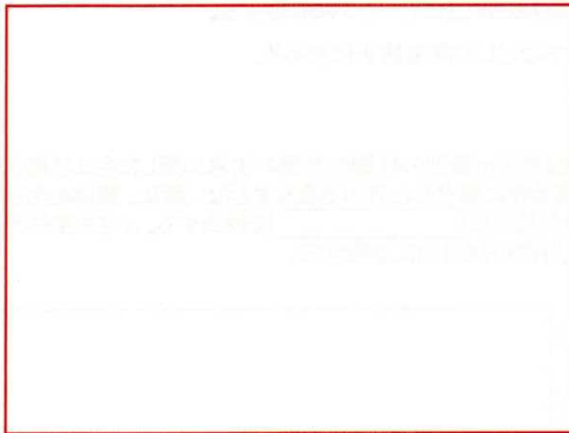
※事業地より影響範囲50m外側において、本種の生息環境箇所を探索し移殖地を決定する。この場合、移殖後の結果について、様々な要因からのリスクを分散するために、複数箇所を抽出する。

2) 移殖対象地における採取と運搬

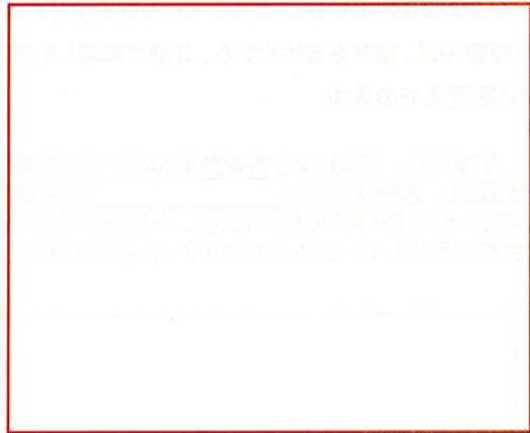
1) で把握した本種の生息環境を踏査し、見つけ採りにより個体を捕獲する。

3) 移殖先での放貝

移殖先において運搬した容器から () を林床に放つ。



移動中の個体



成員の特徴

写真: () の生態・生息環境

表 6.1.4-6 移動に係る指導・助言の概要

| | | | |
|--|-------------|----------|----|
| 専門分野 | 動物 | 専門家の所属機関 | 大学 |
| 実施月 | 平成 25 年 6 月 | | |
| 助言の内容 | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 変更区域の [] については、朽ち木内に生息することから、生息する朽ち木ごと移動することで良いと考える。 ・ [] については、前は小さな穴を開けてそこへ 1 匹ずつ放していたようだが、本種は自分で巣穴を掘ることが出来ることから、そのまま移植地へ放すことで問題は無いと考える。 ・ 移動先については、移動時に併せて現地の環境を確認し、類似した環境へ放すことで問題は無い。 ・ [] については数が少ない種であることから、確認される可能性は低い。本種は発達した暗い林内に生息するため、開けた場所である N-4 地区ではあまり生息していないと考えられる。ただし、発達した林内環境があれば、食草であるイタジイ周辺を注意して観察するとよい。 ・ 捕獲移動時において、これまで N-4.2 で確認されていない貴重な動物が出てきた場合は、その種の生態または生息環境を考慮して移動する考え方で問題は無い。 | | | |

(c) 捕獲移動の実施結果 (N-4.2)

N-4.2 において移動した種と個体数の一覧を表 6.1.4-7 に示した。また、捕獲移動先を図 6.1.4-1 にした。

移動は昆虫類 1 種生息木 2 本、クモ類 1 種 85 個体、陸産貝類 3 種 16 個体、両生類 1 種 1 個体。爬虫類 2 種 4 個体、合計 8 種 108 個体(生息木 2 本を含む)を移動した。

昆虫類では、[] の生息木 2 本を移動した。クモ類は、[] 185 個体を移動した。陸産貝類では、[] 1 個体、[] 12 個体、[] 3 個体の計 16 個体であった。

なお、両生類の []、爬虫類の [] と [] については、評価図書に定める移動対象種ではないが、移動作業中に確認したため、補足的に移動を実施したものである。

表 6.1.4-7 捕獲移動を行った貴重な動物の一覧 (N-4.2)

| 分類 | 種名または亜種名 | 移動個体数 | 備考 | 移動月 | 貴重種カテゴリー | | |
|------|----------|-------|------------|----------------------------|---------------|---------------|---------------|
| | | | | | 環境省 RL (2007) | 環境省 RL (2012) | 沖縄 RDB (2006) |
| 昆虫類 | | 2 注) | 朽ち木ごと移動 | 平成 25 年 7 月 | — | — | NT |
| | 小計 | 2 | — | (平成 25 年 11 月 補足的に実施) | — | — | — |
| クモ類 | | 85 | — | 平成 25 年 7 月 | VU | VU | — |
| | 小計 | 85 | — | | — | — | — |
| 陸産貝類 | | 1 | 成貝 1 | 平成 25 年 7 月 平成 25 年 8 月 | NT | NT | — |
| | | 12 | 成貝 12 | | VU | VU | — |
| | | 3 | 成貝 3 | | VU | VU | VU |
| | 小計 | 16 | — | | — | — | — |
| 両生類 | | 1 | 成体 1 | 平成 25 年 7 月 平成 25 年 8 月 | VU | VU | EN |
| | 小計 | 1 | — | | — | — | — |
| 爬虫類 | | 3 | 成体 2, 幼体 1 | 平成 25 年 7 月 平成 25 年 8 月 | VU | VU | VU |
| | | 1 | 成体 1 | | NT | VU | NT |
| | 小計 | 4 | — | | — | — | — |
| 合計 | | 108 | — | — | 7 種 | 7 種 | 5 種 |

注) 本種は朽ち木内に生息する種であるため、生息を確認した 2 本の朽ち木の移動を行った。



凡例)






-  : 事業実施区域
-  : 昆虫類の移動地点(2地点)
-  : クモ類の移動地点(4地点)
-  : 陸産貝類の移動地点(2地点)
-  : 両生類・爬虫類の移動地点(3地点)

図 6.1.4-1 捕獲移動先(N-4.2)

2) 移動後の動物の生息状況

(1) モニタリングの実施内容

N-4.2 の移動後の動物の生息状況調査は、工事前に捕獲移動を図った貴重な動物種のうち、目視確認により適切な把握が可能な体サイズを有し(とくに体長数mm程度の微少種は適切なモニタリングが困難)、且つ分散能力が低い生態特性から移動箇所に残存している可能性が高い等、移動後のモニタリングが可能と考えられる種として、昆虫類の [] とクモ類の [] を調査対象としてモニタリング調査を実施した。

モニタリング対象種の検討については、過年度において学識経験者等の助言を踏まえて検討されており、その結果を表 6.1.4-8 に整理した。また、過年度に学識経験者より受けた助言の概要を表 6.1.4-9 に示した。

表 6.1.4-8 モニタリング対象種の選定理由

| 分類群 | No. | 種名または亜種名 | 選定/非選定 | 理由 |
|------|-----|----------|--------|--|
| 昆虫類 | 1 | [] | 選定 | <ul style="list-style-type: none"> 朽ち木内に生息する種であり、移動後の分散は低いと考えられる。 朽ち木内に生息するため、直接の計数は出来ないが、移動した朽ち木の外観を観察することで、特徴的な排出カス(生息痕)により生存有無を確認できる。 |
| | 2 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、移動後力があるため、モニタリングによる評価は不可能である。 |
| | 3 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、移動後力があるため、モニタリングによる評価は不可能である。 |
| | 4 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、モニタリングによる評価は不可能である。 |
| | 5 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、成虫になると移動後力があるため、モニタリングによる評価は不可能である。 |
| | 6 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、成虫になると移動後力があるため、モニタリングによる評価は不可能である。 採集自体が困難な種である。 |
| | 7 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、成虫になると移動後力があるため、モニタリングによる評価は不可能である。 採集自体が困難な種である。 |
| クモ類 | 8 | [] | 選定 | <ul style="list-style-type: none"> 地中の巣穴に生息する種であり、移動後の分散は高くないと考えられる。 巣穴を計数することで、生存率の変化を定量的に確認できる。 |
| 陸産貝類 | 9 | [] | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、定量的な評価ができない。 微小な種であり、採集自体が困難な種である。 |
| | 10 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、定量的な評価ができない。 微小な種であり、採集自体が困難な種である。 |
| | 11 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、定量的な評価ができない。^{注)} |
| | 12 | | 非選定 | <ul style="list-style-type: none"> 移動個体の識別が不可能であり、定量的な評価ができない。^{注)} |

注) 大型の陸産貝類については、殻に着色マークした上で放貝することにより、移動個体の追跡は可能ではある。ただし、移動個体数が少ない場合には再確認が困難になると考えられる。また、着色マーキングは確立された手法がなく及ぼす影響も不明なことから貝殻への着色は行わないこととした。

表 6.1.4-9 助言内容の概要

| 専門分野 | 動物 | 専門家の所属機関 | 大学 |
|--|-----------------------------------|----------|----|
| 実施月 | 平成 22 年 11 月、12 月、平成 24 年 1 月、3 月 | | |
| 助言の内容 | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 微小な種類([]、[]、[] 等)については、モニタリングは困難である。ただし、陸産貝類は餌等のデータが不足する種類が多く、生態知見が得られた場合は記録しておくことは意義がある。 ・ [] は朽ち木内に生息する種であり、移動能力が低い種である。 ・ []、[]、[] はかなり移動性がある。 ・ [] については、地点別確認数の推移から、本来生息に不適な場所であるか判断できる可能性がある。減少が認められた箇所は、鳥類等捕食者の要因が介在する可能性についても留意して調査すること。 ・ 移植先の移植前後の環境を比較する手法もよい。 ・ [] はめったに採取されない。そのため、移動自体も不可能と思われる。 ・ [] も採集が困難な種であり、移動自体も不可能と思われる。本種の卵については、20~30 粒が卵塊になっているがなかなかみつからない。 ・ 移植後のモニタリング調査では、複数の世代が混在するため移動個体を特定することは不可能と考える。 ・ 移動後のモニタリングは、昆虫を含めて寿命は短いと考えられることから、半年~1 年間のモニタリングで十分と考える。 | | | |

(2) 調査地点

調査地点は、図 6.1.4-1 に示した捕獲移動先のうち、[]

[] の移動先 No. 1~No. 2、[] の移動先 No. 1~No. 4 である。

(3) モニタリング結果

a) 昆虫類 ()

()のモニタリング結果を表 6.1.4-10 に示した。本種は立ち枯れや倒木などの朽ち木内をすみかとする種であることから、捕獲移動においては、生息する朽ち木ごと移動を図っている。また、昨年度において、移動した生息木の腐朽が進み生息に適さなくなった場合には、周辺へと移動することが推測されたことから、移植時においては生息木に接するよう複数の枯れ木を配置している。

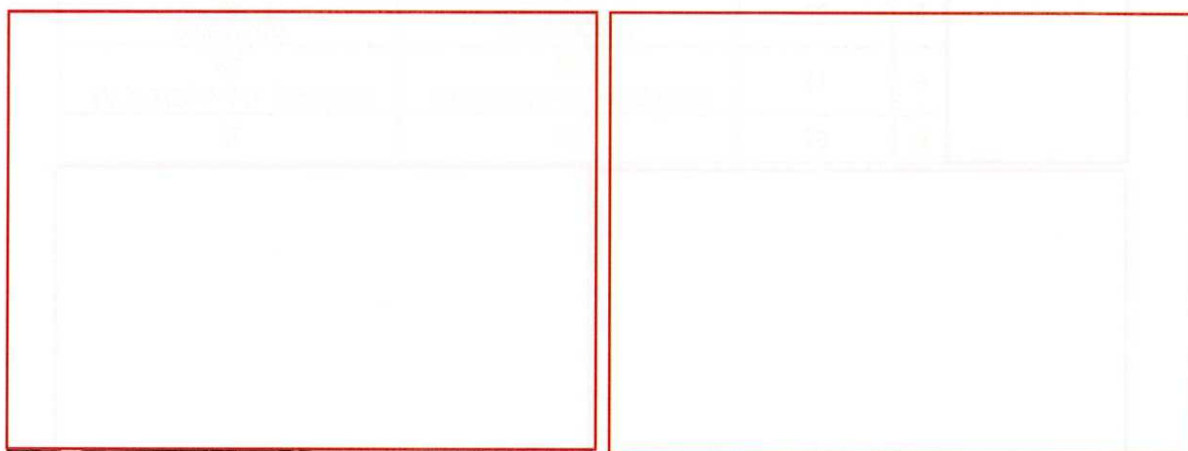
生息状況の確認は、生息場保全の観点から個体の確認は行わず、モニタリングは朽ち木外に排出される特徴的な形状の削りかすの有無を目視観察することで行い、また移動した朽ち木の状態も加味した上で状態の判定を図った。

調査の結果、移動先である2箇所とも()の生息が確認された。また、移動時に配置した枯れ木においても()の生息が確認されており、移植先の環境は良好と考えられる。なお、移動先周囲には、平成25年度12月において、No.2に自然分布していると考えられる4本の枯れ木が確認された。

表 6.1.4-10 昆虫類のモニタリング調査結果(N-4.2)

| 種名及び移動先 No. | 移動月 | 当初移動数 | 平成25年度 | | |
|-------------|------|----------|--------|--------------------------------|----------------------|
| | | | 10月 | 12月 | |
| () | No.1 | 平成25年7月 | 生息木1 | ○ (東側の枯谷に20cm×6mの自然生息木1本有り) | ○ (周辺地に自然生息木なし) |
| | No.2 | 平成25年11月 | 生息木1 | △ | ○ (周辺地に自然生息木4本有り) |

注1) 表中の○は削りかす(生息痕)の確認を示す。
注2) 数値の下の()内に、周辺の生息状況を併記した。



生息木と()によって排出された朽木の削りかす(移動先 No.1、平成25年10月) 移動した生息木と隣接する複数の枯れ木(平成25年10月)

写真：昆虫類の確認状況

b) クモ類 ()

平成 23 年度に実施した () の移植においては、モニタリング調査において、谷が深く陰鬱な環境下の移植地点(平成 23 年度移植地点 No. 5~7)において移植後の生息数に減少が見られた。生息数の減少については、学識経験者より、平成 23 年度は冬季の冷え込みが厳しかったことから、寒さにより死亡した可能性も考えられるとの助言を受けた。これを踏まえ、今年度の移植では、浅く明るい谷部の環境へと移植している。

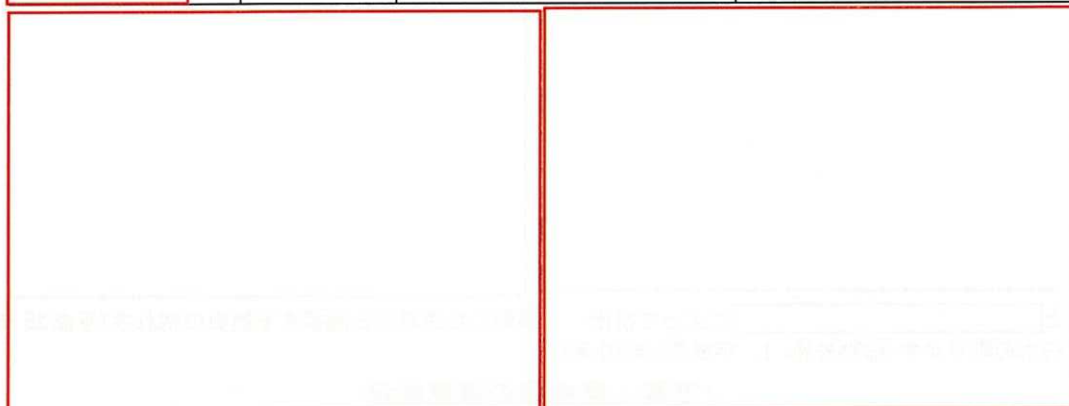
() のモニタリング結果を表 6.1.4-11 に示した。生息状況の確認は、生息場保全の観点から、巣穴を掘っての個体の確認は行わず、移動先とした地表面を目視観察し、特徴的な形状の蓋の付いた巣穴の有無を確認することで行った。また、巣穴の破損状態から放棄巣と思われる確認は除外した。

調査の結果、移動先 4 地点の全てで生息を確認した。しかしながら、No. 4 地点では増加が見られたが、No. 1~3 地点では減少していた。

減少の要因については、移植地の著しい乾燥による環境の変化が考えられる。特に、個体数が半減した No. 2 と No. 3 の脇には、移植前の春季において湿地が存在するなど、湿潤な環境であったが、本年度は渇水のため調査時には干出しており、() が巣穴を掘る土壤に著しい乾燥がみられた。一方、No. 4 地点は、他の地点より土壤に湿気がみられ、生息数は増加していた。

表 6.1.4-11 クモ類のモニタリング調査結果 (N-4.2)

| 移動先 No. | 工事前 移動数 (平成 25 年 7 月) | 平成 25 年度 | |
|---------|-----------------------------|---------------------|---------------------|
| | | 10 月 | 12 月 |
| 1 | 30 | 12 (乾燥著しい) | 20 (乾燥著しい) |
| 2 | 20 | 11 (乾燥著しい) | 10 (やや乾燥) |
| 3 | 20 | 7 (乾燥著しい) | 10 (やや乾燥) |
| 4 | 15 | 39 (他地点よりやや湿気あり) | 38 (他地点よりやや湿気あり) |
| 計 | 85 | 69 | 78 |



() の移動先周辺 (No. 2) の状況 同一地点の 5 月の状況
 写真：クモ類の移動先の状況